

かいぼりで在来種は回復したのか？

～バス・ギル・コイを根絶した池のその後

片岡友美（認定NPO法人 生態工房）

かいぼりとはため池や水路の維持管理作業の一種で、本来は貯水量を向上させるために池等の水を抜き、底泥を「掻いて掘る」すなわち泥をかき出すのが主な目的である。さらに、かいぼりのついでに池の魚や貝などを捕って食べる「貝掘り」や「雑魚取り」という習慣は、90年代後半からはオオクチバスなどの外来魚駆除方法として注目され、ここ数年は都市部の池や濠でも市民ボランティアによる魚捕りイベントとして流行するようになった。一方で、かいぼりとは雑魚取りや外来魚駆除のためのイベントであるという偏った認識が広がり、対象池で外来魚を根絶したら、もうかいぼりをやる必要がないと考えているケースや、むしろ外来魚がいなくなったら在来種保護のために何もしない方がよいというケース、さらに、かいぼり時に在来種を保護するため、十分な池干しをしないというケースも見られるようになった。

かいぼりは農村部の協同作業として大勢の人たちが関わり、主に農閑期の秋から冬にかけて、毎年または数年単位で繰り返し行われていたルーチンワークである。ため池や水路の生きものたちにとって、かいぼりとは数ヶ月間のうちに水位低下や底泥攪拌、干し上げ、湛水という急激な環境変化をもたらし、数年単位で繰り返しやってくる攪乱である。つまり、こうしたかいぼりを含めた農村部の人々の営みこそが、里山や水田などの二次的自然における生物多様性の維持において、重要な役割を果たしていたと考えられる。里山の水辺再生においては、かいぼりによる外来魚の根絶がゴールではなく、定期的な攪乱が必要、つまり繰り返しかいぼりを行うことが重要ではないかと演者は考えている。

演者らが関わる都立井の頭恩賜公園井の頭池（4.2ha、東京都武蔵野市）では、2014年から2018年まで1-2年おきに3回のかいぼりを繰り返し、オオクチバス、ブルーギル、コイ等の根絶に成功した。湛水後の井の頭池では在来種が増加し、生物多様性が著しく回復しているところである。

本講演では井の頭池の事例を中心に、かいぼりによる自然再生の取り組みと成果について報告する。